
息子

ごはんライス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

息子

【コード】

N3780B

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

勤労感謝の日に、息子は、どっか連れてけどっか連れてけ、やかましい。全然、感謝してへんやん！さあ、いったい、どうする、お父さん……!？

休日（前書き）

へんちくりんなシヨタモのです

息子

休日

「ねえん、パパあ。どっか連れてってよお」

息子がやたらにやかましい。たまの休日くらい休ませてくれ。連日の残業でくたくただ。

俺は蒲団の上をまたいでる息子を怒鳴った。

「うるさい。それより、お前、学校はどうした。もう十時過ぎとるぞ」

「だってえ。今日、祝日だもーん」

「え。そうだっけ？」

俺は枕元の卓上カレンダーに目をやる。

「ふうん。勤労感謝の日か・・・って、おいっ」

息子が自分の股を蒲団に激しくこすりながら、更におねだりする。

「ねえん、パパあ。お願い、お願い。どっか連れてってえ」

俺はうんざりしてきた。

「山でも行く？」

「やだあ。たけど、もっとにぎやかなとこ、行きたあい」

俺は静かに鳥の鳴き声でも聴いていた。

「ねえん。パパあ。パパあ。お願いあいん」

息子は腰のスピードを速めた。痛い、痛い。

もーむかついた。確定申告の申請所に連れてつたるか。にぎやかだぞ。でも、まだ、11月だ。

「ねえん。パパあ。パパあ。あたしの話、聞いているう。ねえったら

あ。あん」

「うーん・・・そんなに行きたいの？」

「うんっ！ たけし、にぎやかなとこ行きたい！」

「じゃー駅前のパチンコ屋・・・」

「ダメ！ それ、パパが行きたいとこでしょ。もっと、デイズニー

息子

ランドとか遠いとこ！」

「遠いとこ・・・イラクとか？」

あそこ、今、米兵や部族がドンパチやってて賑やかだぜ」

息子が上から俺の顔に平手打ちを食らわした。

「ふざけないで！ そんなとこ、男の子が喜ぶと思ってんの！
パパ、男の子の気持ちが全然わかってない。たけしだって男の子な
んだから……」

今度はしくしく泣き始めた。普通、男の子は喜ぶんでないの？

「じゃーどこがいいんだよ。ゆってみ」

うーん、と一瞬腕を組み、ひらめいたように息子は言った。

「ラブホテル！」

「は!?!?」

俺は目が点になった。

休日（後書き）

とりあえず、原稿用紙十枚分は脱稿して完結した。膨らませるかどうするか、読者数で決める。あとは、野となれ、山となれ・・・

息子

休日2

「だって、よしおが言ってたもん。あそこ、毎晩、獣たちが荒れ狂ってて面白そうだから一度行ってみようぜ、て」

「そんな不良とつき合うのはやめなさい！」

「パパ、どこか連れてってよう」

「ママに連れて行ってもらいなさい」

「いやっ。いやっ。だって、ママ、どうせバーゲンセールに行くんだもん！ あそこ、怖いよ。イラクより怖いよ」

「確かに……」

どうしたものか。うーん。賑やかで近場で……あ、そうか。

「映画館、行こっか」

「えっ!?!」

急に息子の目がきらきら輝いた。蒲団からぴよんと飛び上がり、畳の上に正座した。

「いま、お前が好きな「きらりんウォーズ」が駅前で作ってたろ。すんげえ迫力らしいぜ」

息子が興奮してきた。

「パパ、大好き！」

そう言っただけに抱きつき、唇を唇に押しつけてきた。うう。息がでけん。く、苦しい……。

たけしはお気に入りのナイキのシューズを履き、俺はドテラのま、腕を組みながら駅前へ向かった。少し寒い、晴れてて風もないので少しあたたかい。

たけしは歩きながら言った。

「パパ。あたしたち、まるで恋人同士みたいだね。うふふ、たけしママになった気分」

「よせやい、気持ち悪い」

息子

俺がそう言うと、たけしは口をふくらませてむくれた。
現代っ子は難しい……。

道ゆくサラリーマンのおっさん、茶髪のチーマーみな振り返る。
俺たち親子、というより息子を見て振り返る。それもそのはず、息子は男のくせに色っぽい仕草をする。ママに似たのだろう。買い物カゴを下げたおばさんたちがひそひそ声を立てている。何か勘違いしとりやせんか。俺は息子に言った。

「たけし、腕を組んで歩くのはよそう」
「なんでえ。やだよう」

息子が俺の腕をギュツと。歩道の向こうから警官がやってくる。

俺はひや汗が出てきたが、警官は俺たちをあっさり素通りして、後ろを走っていた不良米兵たちを追いかけた。椎名産の林檎をかじりながら逃げている。おそらく、八百屋のおばはんを脅してチョコロまかしてきたものだろう。俺は、はあと軽いため息をついた。

死んだママが空の上からそれを見て笑ってる。ママは、昔、ひめゆり特別攻撃隊のパイロットで、合衆国のブラックハウスに体当たりし戦死した。息子が一歳の時の話である。このことは息子には隠してる。悲しすぎるから……本当の母親を知らないとは不憫なヤツめ。

俺は急にうつるとききて、アスファルトの上、人目もはばからず、幼い息子の体をぎゅっと抱きしめてしまった。

「あんっパパ、痛いよ」
「たけし……すまん。俺が不甲斐ないばかりに……すまん。すまねえ。うう」

周りの通行人がジロジロ見てる。

「ママあ。あのおじさん、なんで泣いてるのー？」

「これっ！ たけひこちゃん、人に指さしちゃいけません！ 大人にはいろいろ事情があるのよ……」

やるせなくて俺はますます、息子をきつく抱きしめる。

「痛いよ、痛いよ、パパ。ダメ。こんなところで……家帰ってか
らにしよう。ね？ あん……」

息子が興奮してきたので、あわてて俺は離れた。

たけしは本当に死んだ母親にそっくりだ。彼女はショートカット
でペチャパイ、童顔で背が小さくて幼い声でいつもジーパンばかり
履いていたので余計そう見えるのかもしれない。ただ、彼女は俺よ
り年上でよく励まされていた。

今度は俺が息子を励まさねばならぬのだろう。

うるうるした瞳で、せつなそうに俺を見つめる息子を見ながら思
う。

本当にそっくりだ。

見つめあう二人の後ろから、聞き覚えのある大声が。

「アナータ！ オカネ、忘レテルヨー！」

キャサリーンだ。財布を掲げて息を切らせてる。サンダルを履い
て、アメリカンサイズのエプロン姿のまま。

「ママもいっしょに行こうよ」

「ソーネー。タマニ八映画モ観ナクチャネー。達彦サーン、イイデ
スカ？」

「あ、ああ。別にええよ……」

「やったあ！」

息子が大喜びで、二人の腕を組んだ。

三人はゆっくり駅前へ向かう。キャサリーンだけ背が飛び出して
ちよっと面白い。

市街では、ひたすら、米兵やテロリストたちが銃撃戦を繰り返して
る。

ばばばばああん。どおおおおん。だああああん。

息子はウキウキしすぎて、歩道に転がっていた米兵の首を踏んづ
けたことに気づいてない。

前線に向かい走り去っていく仲間の米兵たちの背中に向かって、俺は心の中でそっと、（ソーリー……）とつぶやく。

「楽しいな、楽しいな。ねえ、ママあ。きらりんてすごいんだよお。きらりん波使うと、一発で都市がふつとんじやうんだあ」

「オー。ソレハ凄イデスネー」

「早く観たいね！ ね、パパ」

「あ、う、うん」

「パパ、人の話聞いているのぉ」

「聞いているさ……」

俺は歩きながらひたすら、そこらを転がってる兵隊の死体と兵隊の遺族に対して、心の中で頭を下げ続けた。キョロキョロして焦点が定まらない。

うしろから、「志村あ。うしろおー！」という、ちびつこたちの声が聞こえた。

「え？」あわてて前を振り向くと、八百屋の屋根からぶら下がっていた、林檎をくわえたままの黒人米兵の死体の顔にぶつかって、キスしてしまった。

「ひえッ！ なんや！」

俺はあわてすぎて暴れたら、首にぶら下げていたマイクのヒモがちぎれて落としてしまった。あわてて、マジヤが小走りで拾いにきた。キャサリンと息子は気づかず先に行ってしまった。

そのうち、数メートル後方の山下ビルの蔭から、サングラスをかけた変なおっさんがひよっこり飛び出し、マイク片手に歌いながら歩いてきた。

やけにウキウキした野郎だ。街の状況をよくウォッチングしろ。

おっさんは、呆然と立ちすくむ俺の前まで来ると、くるっと一回転して両手を広げた。

商店街に転がる兵隊たちの拍手。

コードは、Dm。(了)

休日2（後書き）

一年前に書いたヤツだから、マジヤのところがちよい古いなあ。タモさんはイケるな。ドリフもファンが多いからイケる。

息子

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3780b/>

息子

2008年11月7日07時53分発行